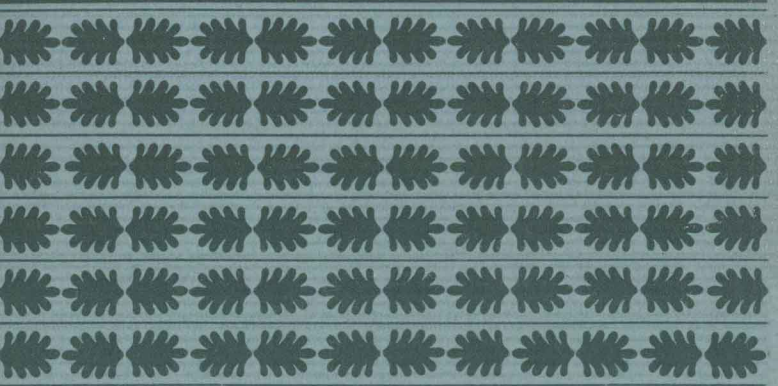
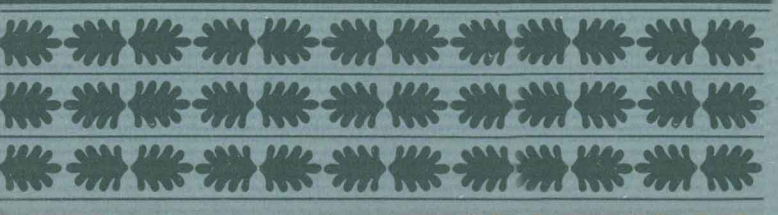


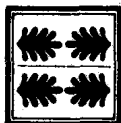
課擊遊屬直室長社

しむむべんかん



庫文社談講





講談社文庫

定価360円

しやちよ しつちやくぜくゆうげき か
社長室直屬遊撃課

かんべむさし

昭和57年6月15日第1刷発行

発行者 三木 章

発行所 株式会社講談社

東京都文京区音羽2-12-21 〒112

電話 東京 (03)945-1111(大代表)

振替 東京 8-3930

デザイン 亀倉雄策

製 版 豊国印刷株式会社

印 刷 東洋印刷株式会社

製 本 加藤製本株式会社

© Musashi Kanbe 1982

Printed in Japan

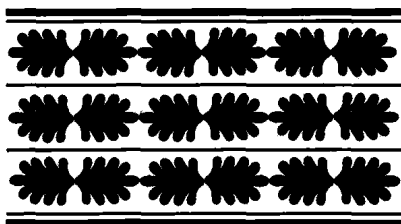
落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送り
ください。送料小社負担にてお取替えます。

ISBN4-06-136234-8

講談社文庫

社長室直属遊撃課

かんべむさし



講談社

目次

社長室直属遊撃課	七
読書日記	四五
SSキット	六七
守るも攻めるも	八三
問題児	一四一
たれながしそおらす	一五九
車掌の本分	一八一
体験療法	一九七
知らんもん	二三七
あくび多くして船	二四五
象のいる世界	二七三

解説

北上次郎

三〇六

社長室直屬遊撃課

社長室直屬遊撃課

株式会社葵合板秋季大運動会。

工場敷地内のグラウンドに、大きくそう書かれた入場門が仮設され、俺を含めたほとんど全社員がそこに集合して、進行係の総務課長が配る紙きれを順に受けとっていた。

今日のメイン・イベント、赤白両軍にわかれて激突しようという、騎馬戦のチーム組み合わせが始められたのである。

「さて、誰が騎手になるのかな」

俺は期待しながら紙片を受けとり、ひらいてみた。白組七番、そう書かれている。

「白の七番、集まってくださあい」

俺はその紙きれを頭の上でひらひらさせ、同じ番号を受けとった仲間を呼び集めた。

「赤の十八番、集まれえっ」

「白組の二十五はどこですかあっ」

周囲の皆も、てんでに声をあげて相棒を捜している。あたり一帯がにわかに騒がしくなり、笑い声があちこちで起き始めた。

運動会の熱っぽい雰囲気、いまや最高潮に達しようとしているのである。

そもそも今日の日曜日、俺達葵合板の社員二百五十余人とその家族は、朝から浮かれに浮かれていた。

天気はいいし、開会の辞を述べた社長はいつもにまして上機嫌でにこにこしていたし、取引先から賞品として提供されたビールやウイスキーの箱も、本部席テント横に山と積んであったから、全員大いにはりきって走りまわり飛びまわりしていたのである。

部対抗のリレーがあり、家族参加のスプーン・レースがあり、綱引き玉投げ障害物競走と、およそ運動会と名のつく催物には必ず出てくる種目すべてが用意され、折詰支給の昼休みをはさんで、次つぎに進められてきた。

拍手、歓声、笑い声。しんと静まりかえった日曜の工場地帯のまんなかで、俺達は思う存分はしゃぎまわってきたのである。

そしていよいよ今日最大の呼び物、赤白対抗の騎馬戦が始まろうとしているのだ。

赤三十組に白三十組、つまり工場も含めた全社内の子会社社員数に合わせてチームをつくり、両軍激突して紙帽子の奪いあいしようという趣向である。

女子社員六十人、男子社員百八十人。それぞれが早くも興奮気味の顔になって相棒を呼びあっている。

ジーパンにTシャツ姿の男、トレーニング・ウェアの女の子、ポロシャツに替ズボンという年配部長、服装はまちまちである。

「赤の十二番、赤の十二番」

「白の二十九、こっちだぞうっ」

女子社員には印をつけた紙片を配ってダブリを防ぎ、男達にはまったく無作為にそれを配布したため、それぞれ自分が誰と馬を組み、どの女の子を騎手にするのか見当がつかない。

そこがまたひとつの楽しみで、皆、期待の声をあげているのである。

「きゃあ、私、部長さんの組イ？」

「ま、ま、そう嫌がるな」

互いに確認して笑いあっている。

「白の七、白の七番集まってくださあい」

俺はそんな混雑の中に立ち、紙片をふりながら、また大声で呼びかけた。

「おう、俺だ俺だ」

最初にやってきたのは、営業三課の仙代課長^{せんだい}だった。俺は工場の研究室にいるから普段ほとんどつきあいはないが、なかなか評判のいい人物である。年は三十九歳、浅黒くひきしまった顔で、鼻筋も通っている。女子社員の間では人気抜群の中年男なのである。

「白の七番、私でえす」

次に近づいてきたのは、経理部の島崎三千代だった。高卒で勤めだして今年で二年目、小柄ながら均整のとれたスタイルで、しかもちょっとした美人である。

おまけに珠算が一級で簿記が二級、仕事をよくこなして愛想もいいという子だから、独身社員の間では、何とかモノにと狙^{ねら}っている奴も多いと聞いている。実は俺もその一人なのであって、だから彼女が白の七番だと近づいてきたときには、思わずしめたと口に出しかけた。わっと嬉^{うれ}しくなってきたのである。

「ああ、わしも白の七番だな」

そして最後に人混みをかきわけかきわけやってきたのは、長身で髪の毛の若干^{じやつかん}薄くなった御大

將、松本完治六十四歳。すなわち社長なのだった。そばに来て俺達を見まわし、にこにこ顔でこ
う言った。

「これは素敵なメンバーだが、しかし、わし、ちゃんと走れるかな」

ゴルフウェアにズック靴をきこちなく履き、その場で足踏みを始めている。

「大丈夫ですよ、社長」

課長がこたえ、俺と社長とを一瞬見くらべて、馬の組み方を提案した。

「社長は一番背が高いから、先頭になってください。僕と長谷川君が後にまわりますから」
「なるほど、それがいいかな」

社長はうなずき、むこうむきになって両手を後にまわした。俺が左、課長が右になって、それ
ぞれ社長と手を組み、もう一方の手をその肩にかけた。

「じゃあ、しゃがむから乗りなよ」

「はい」

課長の声に、三千代は係員から手渡されていた白の紙帽子をかぶり、騎手の位置についた。

「うひょお」

瞬間、俺は心のなかで喜びの声をあげていた。なぜならたつたいま、俺の右腕と彼女の左ふとも
も内側とが、ぴったりと密着したからである。ジープンのごわごわした生地が夾雑物として存
在してはいるものの、これはもう、密着としか言いようのない状態なのである。

俺は右腕に全神経を集中し、彼女がこの競技のためにか、そのあたりをガードルで完璧に防禦
し、かためてきていることを知った。

「社内の独身男のなかで、こういうことを確認できたのは俺しかおるまい」

馬鹿なことを考え、この状態がいつまでもつづけばいいなとも思った。そうならば、俺はこの右腕を通して、常に彼女の体温を――

そこまで考えたとき合図の笛が鳴り、ついでマーチのメロディがスピーカーを通して流れてきたので俺達は立ちあがった。

入場門を赤白二列でくぐり、そこでわかれて行進する。観客席からは期待の拍手と声援が聞こえてくる。全員待ちかねていたのである。

グランドの端と端とに整列し、互いに相手を睨みあう。しばらくの静寂、緊張の数秒。パーン！

そしてピストルが鳴った途端に歓声が湧きあがり、両軍が同時に走りだした。隣の騎馬など全員若い奴等だから、あきれるほどのスピードで突進していった。

しかし、残念なことにこちらはそうはいかない。先頭が六十四歳で右が三十九歳だから、よたよたと走りだした。

しかも、三千代が腰を浮かすということを知らないらしく、尻を腕と腕との間に落してしまっているから、重みが後方斜め下にむかって加わり、なおのこと走りづらいのだ。

グランドの中央では、すでに両軍入り乱れてワアワア声をあげている。赤帽子が宙に飛び、白帽子がひらひらと落ち、女の子のかん高い声もまじって、大混戦をつづけている。

「社長、何とかもう少し速く」

「島崎君、腰を浮かせろ」

俺と課長が必死になって二人をせきたてた結果、遅ればせながら俺達も、ようやく中央に達することができた。

だがそのときにはすでに社長は息が切れている。あつちを狙おうかとよたよた、こつちから追われてのたのたのた。戦場をただもうろろしているうちに、戦闘停止を告げるピストルが鳴ってしまったのである。

両軍が元の位置に戻り、判定の結果は白組の勝ち。なぜなら信じられないことに、無傷で残っていたのは俺達だけだったからだ。

出場者も観客も、全員大笑いである。

そしてその声がようやく収まりかけ、他の組が馬を解き始めたときになって初めて、俺達は大変なことに気づいたのだった。

「さ、島崎君、降りて」

「は、はい」

課長の声に、三千代がおろおろとこたえた。

「どうした、降りにくいのか」

「い、いえ、そうじゃなくって」

彼女は泣きだしそうな顔になって言った。

「降りられないんです。足が動かないんです」

えっと叫んだ俺と課長と社長とが、次の瞬間には三人揃って自分の状況を確認させられ、うわああつと声をあげていた。

俺の左手と社長の左手、課長の右手と社長の右手、それに社長の肩にかけた俺の右手と課長の左手とが、それぞれ互いに吸引力を与えられたかのように密着し、どう解こうにも解けなくなっていたからである。つまり俺達四人は、人馬一体になってしまっていたのである。

2

社員全員、それに観客席の家族達までがあわてて駆けよってきて、それから一時間余り大騒ぎしながら俺達をひき離そうと奮闘してくれたが、それらの努力はまったく効果を現わさなかった。

どの方向からひっぱろうが、何人同時に力を込めようが、俺達の結束状態には何の変化も起きなかったのである。

「筋肉弛緩剤を注射したらどうだろう」

「水をかけたら離れるんじゃないか」

真顔で無茶苦茶を言う奴もいたが、これはそういう種類の結合ではない。ただ馬になり騎手になり、するとそれが突然離れなくなってしまっただけなのである。

「仕方がない、救急病院へ運ぼう」

結局、社長の息子である販売部長の決断により、俺達は合板を運ぶワゴンタイプの車に乗せられることになった。無論、運動会は即刻中止である。

後を総務課長にまかせ、部長がワゴンを運転して、俺達は市街地の病院へとむかった。仙代課

長の家族、つまり奥さんと男の子、それに三千代の母親の乗った車が、それに付いて走っていく。

「どうも、大変なことになったものだな」

俺達が人馬もろとも横倒しになったり、あるいは三千代が頭を天井にぶついたりしないよう、ゆつくりとワゴンを走らせながら部長が言った。

「まったくだ」

杜長がこたえた。姿勢を極力低くするため床にべたんと尻をつけ、足は前へ投げ出している。ふうっと聞こえたのは仙代課長のため息だ。俺と同じく胡座の姿勢をとり、誰に聞くともなくつぶやいた。

「いったい、どうしてこんなことになったんでしょうかねえ」

「……………」

三千代は背をまるめ、首を横にかたむけて天井を気にしながら、ときどき思い出したようにしゃくりあげている。

驚き、あわて、うろたえ騒ぐのはすでにグランドでたつぷりとやってしまったため、四人とも気がぬけたようになっていたのだ。だから会話も断片的で、全然発展しないのである。

車は工場地帯をぬけ、それから長いことかかって、ようやく市街地の救急病院に到着した。急患用入口にバックで入って停止する。

「ま、とにかく医者に見せましょう」

部長が何となく投げやりな口調で言い、運転席から降りて、荷台のサイド・ドアを開いてく